

## 第二十八章 風に吹かれて

ソシア共和国の大統領も中華民国の皇帝も民主主義をバカな制度だとけなすが、実は怖がっている。一方、自分自身の経験から他国の同業者（権力者）への対応は心得ている。

たらふく私腹を肥やしてやって借金を負わせる。するとその国はデフォルトに陥る。当然国民は反発するから軍に武器を供与してデモや革命を押しさせる。うまくいかなくて革命が起これば亡命先を斡旋する。権力者が生きながらえれば実質的にその国を乗っ取る。

このような戦略で独裁者が支配する貧乏な国々にソシアや中華民国が気前よく援助す。

ボロボロになった国を支えるのはボランティアしかない。ソシアや中華民国に対抗する民主主義国家の経済も盤石ではない。むしろ疲弊している。

さて独裁主義と民主主義のどちらがいかという論争があるが、根本的には人間のサガの問題だ。言い換えれば良心をどこに向けさせるのかという観点で国家論を展開すべきだ。

家族愛は体制に左右されない。だが愛国心はどうか。これがくせ者だ。権力者から見ると愛国心は押しつけるもので国民から見ると強制されるものになる。立派で信頼される人格を持つ権威者であれば国民は同意するだろうが、「権威」が「権力」に変身すると信じた国民は馬鹿を見る。何回も騙される国民はいないから、政府は信用されない。人格者は独裁者にならない

が、独裁者には人格者はいない。

権力者はあらゆる手段を駆使して権力を握ると今度は權威を求める。自分は立派で信頼されるべき人間だと国民に押しつける。民主主義国家では権力者は選挙があり任期がある。ただしブレーキが効くまで少し時間がかかる。

独裁国家ではブレーキがない。もしブレーキがあるとすればそれは「革命」と言う名の急ブレーキだ。しかし、かなりの血が流れる。なぜなら多数の国民が乗った列車に急ブレーキがかかると脱線転覆するからだ。もちろん独裁者も転覆するが。

\*

聖典も権力者の前では小学校の校則のような幼稚な規則に成り下がる。信仰していた神をいつの間にか独裁者にすり替える。あるいは神の上に独裁者の椅子を用意する。信じる者は救われるのではなく、殺されないという規則に組み込まれる。自由はなく服従だけが存在する規則だ。いわゆる強力な新興宗教が誕生する。

だから、ほとんどの民主主義国家では政教分離を原則とするルールを作る。完全分離から信仰の自由度をほぼ無制限に認めるという幅があるが、神の上に権力機構があるという形態は取らない。

神など宗教が国家を形成する場合もある。異教徒に対しては排他的であるが故に小粒な国家が多い。しかもインターネットの普及で国体を維持するのに四苦八苦する。伝道や聖典などで

神の教えを徹底するのは困難で、ましてや新たな信者を獲得するのは困難である。ただし、逆にインターネットで勢力が拡大する場合もあるから、ある意味恐ろしい。それはさて置き、絶対的な観念が通用しなくなった。それは価値観が人間の数と同数にまで増えたからだ。ファンがドンドン増えてアイドルになってもいつの間にか飽きられて捨て去られる。調子いいときは自分の実力、そうでなければ社会が悪い。

この社会というのは一人一人の人間の足し算的集合体。逆説的に言えば実力というのは足し算的集合体の瞬間最大風速に過ぎない。強すぎるといたずら風になる。ボブディランが歌った「風に任せて」そのもの。音楽家の彼がノーベル文学賞を受賞したのは流転する「風」を人間個々の想いの中でを最も重要なものと賛美したからだ。

\*

特急だから窓は固定されていて開かない。しかし、駅に到着すると周辺の空気を車内に取り込む。その土地によって空気は異なる。まず香りが違う。花の香りが異なるように。味も違う。深呼吸すると口の中を流れる空気の味が違う。流れる音も違う。肌触りも……

イリの頬を風が通り過ぎる。目を開けると心地良さそうに背伸びして起き上がる。

「サボリーナ駅に着きました」

一気にイリの表情が硬くなる。

「原発は大丈夫なの？」

長老が顔中のしわを伸ばす。

「発電所も送電線もすべて無事じゃ」

「ソシア軍は退去したの？」

「ソシア軍はヘビが苦手のようにじゃ」

「スネーク・ライナーのおかげ？」

「そのようじゃ」

「ヘビは苦手だけどスネーク・ライナーなら一度乗ってみたいわ」

長老はしわを元に戻して今度はくしゃくしゃにして笑う。

「女王様。スネーク・ライナーは特急列車ではなく特殊列車であることは間違いない」

先ほどまで車内を流れていた風が止まる。特急ウク・ライナーが次の停車駅に向かって出発する。長老が包みを手渡すとイリが首を傾げる。

「サボリーナ駅の名物じゃ」

包みを開けると饅頭のようなモノが入っている。

「原発饅頭じゃ。食べて見なされ。少しピリピリします。お口に合うかどうか……」